

(オプタテシケ山)・6 芦別岳・7 夕張岳

平成 20 年 (2008) 6 月 30 ~ 7 月 4 日

三百名山のオプタテシケ山に登ってトムラウシ山を眺めた翌日、4 時に宿を出て、芦別岳に向かった。

芦別岳は夕張山地のほぼ中央に位置するこの山地の最高峰で、鋭峰を天を突き上げる北海道では数少ない岩山のひとつである。東側のユーフレ川の源頭部は岩場でバリエーションルートの岩壁、岩稜、ルンゼが幾つもある。登山道は沢沿いの変化に富んだ旧道、尾根歩きの新道 2 つがあり、1 周することもできる。

富良野から 38 号線を 40 分ほど走り、^{やまべ}山部自然公園のすぐ手前にある新道登山口 (375 m) に着いた。

芦別岳 標高 1726 m

新道登山口 — 鶯谷 — 芦別岳 往復 (8 時間 45 分)

公園のトイレを借り、5 時 05 分、分貯水池の向かいの「熊注意」の看板が掲げている登山口から登り始めた。山はのっけから急登で始まり、話し声ひとつなく、ガイドさんの鳴らすカウベルの音だけが、静かな森の中に響きわたる。



15 分ほど登ると幾らかゆるやかな道になり、またツバメオモトの生える急坂に変わった。こうしてしばらく急登すると、少し緩やかな道になり、又しばらく急登を続けることを 3、4 度繰り返す。皆、押し黙ったまま、森の奥から聞こえてくるウグイスや馬のいななきに似ているコマドリの鳴き声に励まされながら登っていく。

5 時 55 分、やっと下に富良野盆地が見えるゆるやかな起伏の尾根上に着き、ひと休みする。爽やかな風が吹き抜け、疲れが少しとれた。

すぐ上の登り口に^{しんぎん}呻吟坂の札が垂れ下がっているの見て、また急坂を登っていく。呻き^{うめ}苦しむ程きつい坂ということで、こうした名を付けたのであろうか……。

これを 1 時間ほど登って、6 時 55 分、やっと平らな見晴台 (標高 900 m 台) に着いた。小広い台地の大木のダケカンバの下から眼下に、富良野盆地のメロンハウスであろうか、たくさんのビニールハウスが見える。

これからもまだまだきつい登りは続き、1107 m 峰の左手を巻くように登り、傾斜が緩くなり 7 時 30 分、平らな鶯谷に着いて小休憩する。ここは旧道と繋がる覚太郎コースとの分岐点である。

左の新道を進み、ダケカンバ林の尾根で花を付けたズダヤクシュ、実を付けたフッキソウ、エンレイソウ、チシマヒョウタンボクの花などを見ながら登っていく。すると時々本谷を挟んで鋸状のギザギザの稜線や急峻な夫婦岩の X ルンゼが見え隠れする。旧道はこの岩尾根を間近に見ながら登るので、新道コースよりも厳しい。

8 時 20 分、樹林に覆われ見晴らしがない半面山 (1397 m) の広い平らな頂に着いた。ここからコルの熊ノ沼に下りていくと、花を付けたチシマヒョウタンボクをたくさん見られ、じめじめした湿地のコルにはミズバショウの花が咲いている。そしてササと低木に覆われた沢状のザレた道をしばらく登り返していく。

すると次第に視界が開けてきて、広い斜面をジグザグに登るようになった。足元にたくさんの鮮やかな黄色のチシマキンバイ、キンポウゲの花が咲き、その中にコバイケイソウ、シラネアオイ、オオバキスミレ、ウコンウツギ、ジンヨウキスミレ、カラマツソウの花も混じり、またタカネバラも蕾を付けている。

登山道を右にわずかに外れ、9 時 15 分、^{うんぼう}雲峰山の狭い砂礫の頂に着いた。目の前に谷筋に少し雪を残こした芦別岳が大きく望め、その右手に旧道の山並みが続いている。ここにきて一気に体調を崩した。急登の連続で、しかも天気良すぎて暑い。その上、昨晚はいびきに悩まされて寝不足である。立って景色を見る余裕はない。腰を下ろして休憩する。

ここで短くコルに下って緩やかに進み、チシマキンバイ、シラネアオイ、ミヤマオダマキなどの花を眺めながら、緑美しい芦別岳の東斜面を巻くように登っていく。最後は大きくジグを切る。

10 時 55 分、先客が 5 人いる岩塔状の狭い頂に着いた。岩場に咲くベンケイソウ、ミヤマダイコンソウが風に揺れ愛らしい。

明日登る南の夕張岳や北東の十勝、大雪の山並みを 25 分ほど楽しんで、同じ道を下りていく。下りは楽である。11 時 25 分に半面山、12 時 05 分には鶯谷、そうして、13 時 50 分、日照が強い登山口を下りてきた。続いて夕張の観光地を巡って宿に向かう。明日は花の名山で有名な夕張岳である。

夕張岳は北海道の中央部を南北に走る山地の南端にあり、訪れる人は同じ夕張山地の最高峰の芦別岳よりも多い。その訳は上部に蛇紋岩の天然記念物のメランジュ帯の露出地があり、固有種をはじめ、多種類の高山植物が生えているからである。

翌日 5 時 40 分に宿を出て、452 号線を少し下って夕張川沿いに走る。そしてシュウパロ湖の手前で左折し、赤くさび付いた橋桁の白金橋を渡ってペンケパロ川沿いの林道に入った。道はデコボコで道幅も狭いので、小さめのバスでないと通れない。

40 分ほど揺られて 7 時に登山口 (500 m) に着いた。二百名山では人に会わないことが多いが、ここは珍しく人で溢れている。

夕張岳 標高 1668 m

林道ゲート — 馬ノ背コース分岐 — 望岳台 — 吹き通し — 夕張岳 往復 (9 時間)

7 時 5 分、林道ゲートをくぐり、シラカバ、エゾマツの生える広い林道を歩き始めた。10 分ほど登ると、冷水コースと尾根コースの分岐に着いた。ここで花の多い冷水コースひやみずを登ることになった。「冷水コースを登りたい」と話したことが功を奏し、願いが叶えられて嬉しい。

造材作業道跡に咲くマイヅルソウ、クルマバムグラ、ズダヤクシュやまだ蕾のエゾレイジンソウ、それにトリカブトなどを見ながら緩やかに登ると、急な山道に変わった。大木のブナ、ダケカンバなどの広葉樹林に針葉樹も少し混じる西斜面を登っていく。

サンカヨウ、タケシマラン、ミヤマハンショウヅルや青い実を付けたツバメオモトなどを、続いてミズバショウ、ミゾホウズキの花をたくさん見るとすぐ、8 時 15 分冷水ノ沢に着いた。枯れた大木に標識が取り付けられている。沢から流れる冷たい水を頂きひと休みする。



さらに登って前岳ノ沢を過ぎると、目の前に前岳が見えてきた。これに向かって左に迂回するように登っていく。ゴゼンタチバナ、ムラサキヤシオ、タケシマラン、クルマバツクバネソウ、マイヅルソウ、サンカヨウ、種を付けたツバメオモトがある。

尾根上に登り切り、8 時 45 分、馬ノ背コースと合流する前岳の西尾根に出た。ダケカンバの白い木肌が美しい、展望が少し開けてきたこの尾根道を進

んでいく。すると実を付けたサンカヨウがたくさん出てくる。

尾根の傾斜が増すようになり、緑の美しい草地と大岩の間をくぐり抜けながら急登していく。するとシラネアオイがたくさん見られる平坦地に出てきた。ここは大勢の人が休んでいるので、先を急ぐ。名残のシラネアオイの花が見られるこの辺りは、点在する大岩と緑の景色がとても美しく、気持ちが和む。

露岩の多い道を急登すると 9 時 15 分、平らな台地・石原平せんげんたいらに着いた。1 本のダケカンバの下は、シラネアオイで埋め尽くされ、見えるものは全てシラネアオイである。これほどの大群落を今まで見たことがない。この中にはシロバナのシラネアオイも混じるそうであるが、この時期はシラネアオイの残り花(白に近い淡い青)が少し咲いているだけである。花の盛りはさぞかし見事であろう。この台地の端から目の前の滝ノ沢岳の別名をもつ姫岳を眺める。涼風が通り抜け、何とも快い。

今度は道端に咲くシラネアオイの残り花やハクセンナズナなどを見て、北に向かう。そして岩の出る前岳の中腹の細い道でノウゴウイチゴの花やベニバナイチゴの蕾を見ながら巻いて、少し登ると、9 時 32 分、稜線上の岩が張り出した望岳台に着いた。ここでも大勢の人が休憩し、昨日登った芦別岳や谷向かいの近くの三角形の滝ノ沢岳などを眺めている。私たちもこれらの景色を楽しむ。

これでもうきつい登りはなくなった。前岳の岩峰の北面をトラバースしながら夕張岳の山頂部を望んで、緩く下るとトラバースは終わった。

明るく開けた見通しの良い道から本峰が見えてきた。しばらくは緩やかにアップダウンし 9 時 57 分、第三の水場の憩沢いこいざわに着いた。大ぶりの淡い青色のシラネアオイ、黄色のシナノキンバイ、エゾノリュウキンカ、チシマキンバイソウの花が実に美しい。

緩く登って、それほど広くない乾いた前岳湿原に出ると、ムシトリスミレやゴゼンタチバナ、チングルマ、ウコンウツギの花が咲いている。

ここからは起伏の緩い尾根を進む。前方の男岩を眺めながらいったん緩く下って、背の低くなったダケカンバの木をくぐって、緩やかに登っていく。すると目の前に岩塔のガマ岩が見えてきた。

ガマ岩の西側を通り、岩と小さなヒョウタン池 (1390 m) との間を木道で抜けていく。池のほとりに鮮や



かな黄色のリュウキンカの花やサンカヨウ、シラネアオイが見える。

やがて斜面の右の下が開けるザレた地肌がむき出している蛇紋岩の露出地に入った。ここがユウバリコザクラの咲くお花畑である。右下に咲くユウバリコザクラの花は盛りは過ぎ、道からは遠く離れているので写真は撮れない。左手の斜面にはエゾハクサンイチゲ、シソバキスミレ、エゾミヤマクワガタ、キバナシャクナゲなどの花が咲いている。

この辺りから山頂が遠望できるようになり、まるで高原を散歩している気分になった。カンチコウゾリナ、ユウバリタンポポ、ミヤマオダマキ、エゾグンナイフウロ、ハクサンチドリやユウバリリンドウを見ながら、右に大きく迂回する。すると広大な湿原の花畑が広がり、ムシトリスミレの花が多くなった。その湿原の中の木道を進んでいく。

チシマツガザクラを少し見ると、今度はシロウマアサツキの原に変わった。緩やかに登っていくとアサツキの広い原がまるでネギ畑のようにどこまでも続く。そしてハイマツの下にたくさんのユウバリタンポポの花、イブキトラノオ、エゾノマルバシモツケソウの群生する道を行く。

木道はなくなり、チシマヒョウタンボクの花咲く緩やかな登りに変わって、緑色の蛇紋岩の露出する吹き通しに入った。風衝草原のザレた道の両側に、お目当てのユウバリソウがある。花の盛りはもう過ぎ、枯れ花になりかけている。他に地にへばり付くようにユキバヒゴダイ（蕾）が、また花を付けたエゾヒメクワガタ、エゾミヤマクワガタ、ナンブイヌナズナ、ユウバリキンバイ、ミヤマアズマギク、チシマキンレイカ、シソバキスミレなどがあり、夕張の固有種が集まっている。

このはずれで長大な金山コースと合流し、ハイマツの急斜面のジグザグ道を蛇紋岩を踏んで急登していく。その足元にも背丈の低いタンポポ、ヨツバシオガマ、ツマトリソウなどの花がたくさん咲いている。これらの花を見ながら列の最後をゆっくりと登っていく。

急坂を登り切って三吉神社の祠のある窪地に出た。ここにはキバナシャクナゲ、イワウメ、ミヤマダイコンソウ、ウラシマツツジ、コメツガザクラなどの花が咲いている。頂は



すぐ上である。

短く急登し、11時35分、夕張岳の狭い頂に着いた。東は大雪山から日高山脈、西は札幌近くの山や羊蹄山が望めるが、風が強くて、とてもじっとして居られない。そこでこれらを確認することなく、たくさんの登山客が行き交う下の窪地に下りて、ゆっくりと昼食を摂る。

12時15分、同じ道を下りていく。14時に石原平、馬ノ背分岐に14時30分、冷水ノ沢に14時50分に下り、林道ゲートに16時に降りてきた。今日はゆっくり歩き、花の名山を十分楽しむことが出来た。大満足である。

4 カムイエクウチカウシ山

平成20年（2008）7月10～14日

カムイエクウチカウシ山は帯広の日高山脈の中央部に位置する、一等三角点のある山である。標高は北の幌尻岳よりは低いが、重厚感に溢れた名峰で展望が良く、様々な高山植物が彩るカールも美しい。また氷河期の生き残りのナキウサギもいる。

カムイエクウチカウシ山（カムエク）、登った人は皆、二百名山の中で1、2の難関の山であると言う。しかし二百名山に入っている以上、登らないわけにはいかない。大阪の山仲間と2度試みたが、2度とも台風に遭って今年は三度目の挑戦である。

この山はどうしても登りたい、そこで今年は普段のトレーニングも負荷をかけ、毎日の山登りで通過する階段を15～20回往復し、歩く距離ものばしてきた。そしてふれあいセンターのジムでの筋トレにも励んできた。その成果は幾らか出てきたのか、難しいと言われる山も、寝不足がたたった芦別岳以外は快調に登ることができた。カムエクにかける思いは強い。今なら不安はない。

千歳空港内のホテルで前泊し、翌日迎えの車に乗り込んで、一路、日高の七ツ沢林道に向かった。

カムイエクウチカウシ山 標高 1979 m

1日目 林道ゲート — セツ沢出合 — 八ノ沢出合（3時間50分）テント泊

2日目 八ノ沢出合 — 三ツ股 — 八ノ沢カール — カムエク 往復（11時間40分）

3日目 八ノ沢 出合 — セツ沢出合 — 林道ゲート（3時間35分）

七ツ沢の6.5kmほど手前のゲートで車を降り12時10分、沢靴を履いて札内川沿いの林道を歩き始めた。このジャリ道はとても広い。この先にもゲートが2カ所あり、立派なトンネルも出てくる。「大雪山にトンネルを掘り、国道を通す計画があった」と聞くが、これらはその名残なのかな……？ 不明である。

ダム湖の先の工事最終地点にかかる立派な大きな橋を渡って、13時54分、林道の終点の七ツ沢の出合に着いた。

ここで左手から流れてくる七ツ沢を見て、七ツ沢橋護岸脇（工所用飯場跡）から、左手の大きな札内川本流に入った。札内川はとてつもなく大きく、中洲も随分広い。

いよいよ八ノ沢出合までの廻行が始まった。ガイドさんを先頭に雨が降り出しカッパの上を付け、左手の支流かなと思えるような所に入っていく。そうして中洲に。今日はいつよりもより水量が少し多いそうであるが、水はそれほど冷たくなく、心地良い冷たさである。（先日のオプタテシケ山も寒くなかったので、安心していましたが……。今年の北海道は積雪量が少なく、雪解けも20日ほど早かった。それに比べ北アルプスはたくさん雪が積もり、槍ヶ岳は7月7日でも上の旧槍平小屋からヒュッテまでは雪が残り、8本爪アイゼンが要ったそうである。山友は5月の連休に行き、大変だったと話していた）

ここからしばらく左手の河縁の樹木の中の平坦な踏み跡をたどる。そうして再び膝下ぐらの深さの中を徒渉し、右手の河原に移った。ガイドさんは水量を見ては、浅い歩きやすい所を選んで徒渉し、水が多いと見ると、すぐそばの笹藪や森（獣道のようにたくさんの踏み跡がある）の中に入ったり、大きな石のゴロゴロする河原の河縁を溯ったりする。彼はこの山に10回登っているようで、コース取りが実にうまい。

広い河原は巨岩がゴロゴロし、巨木も流れ着いて暴れ川のような様相をしている。川の中には小さな流れが幾つかあり、どれが本流なのか分からないような所も出てくる。重い荷物を背負う二人の若者は、自分でコース取りをし、見えつ隠れつの所を歩いている。彼



らは食料やテントを運ぶ頼もしい助っ人である。こうして4度徒渉して、左手から尾根が張り出した河原の右端を廻り始めたところで、突然若者二人が前に呼び出され、先を急いだ。どうやらキャンプ場が近づいてきたようである。

右手の樹林の中に入り、平らな踏み跡をたどって少し開けた所を過ぎ、16時、樹木が少し切れた広い平坦地に着いた。石を積み、木を燃やしてキャンプした跡

がある。左手の10mほど先では、八ノ沢がゴウゴウと音を立てながら流れている。

テントが手早く組み立てられ、夕食の準備が整った。雨は一時止んだかと思っただが、また降り始めた。8時過ぎに眠りにつく。雨は夜中も降り続ける。

翌朝3時半に起きると、止んでいた雨が、又しとしと降り始めた。ガイドさんのザックが小さいのを見て、急いで小さいザックに荷を詰め替える。するとガイドさんが「小さいほうが良いよ」と、声をかけてきた。

雨がどうにか止み、沢靴に沢スパッツを付け、5時15分、テント場を出発した。まずはガイドさんを先頭に、キャンプ場から左手の札内川八ノ沢沿いの、右手の樹木の中を歩き始めた。樹林の中に咲くミソガワソウの花が美しい。そして水の少ない所を探しては、沢を3回ほど徒渉する。次第に沢が明るく開けるようになり、傾斜も幾らか増してきた。

よくもこんなに大きな岩が上流から流されてきたものだと、呆きれるほど大きな岩が、川を埋めている所に出てきた。この辺りは川の端を、背を越すような巨岩の間を縫ったり、巨岩を踏んだりして溯っていく。

5時51分、巨岩が埋っている川原で休むと、奥に小さく三ツ股や緑濃い国境稜線の山並みが見える。またしばらく狭くなってきた川原や樹林の端を登って行って、三ツ股と呼ばれる3つの滝が合流する下に出た。

そして7時5分、平らなとてつもなく大きい岩盤の上に着いた。この気持ち良い巨岩に腰を下ろし、ひと休みする。目の前に3つの滝が流れ落ちている。右手に水量が多い滝が、その左に垂直に近い岩壁からは細い滝、その左には水量の多い滝が、どれも帯状に水が100mほど落下している。果たしてどの滝を進むのか？ 左2本はとても登れるような滝ではない。「真ん中の滝を登っていく」と、ホームページに書き込まれていたものがあったが、多分1番右手を進むのであろう。ガイドさんにコースを確認すると、やはり右の滝の縁を登っていくそうである。

この辺りは例年なら7月いっぱい雪渓が残っているそうだが、今年は雪がない。まずは安心する。仲間のお兄さんがこの6月にきて、「雪が多く道に迷い、食べ物もビバーク用品もない中、寒い夜を過ごし、死ぬ思いで17時間かけて登った」話を聞いている。

この大きな岩盤の右端から斜上すると、花がたくさん咲き、一番多いのがヨツバシオガマでシナノキンバイも多い。足元の良くない樹林の急坂を枝などにつかまりながらよじ登っていく。

8時25分、見晴らしの良い小高い台地の出っ張り、白いしぶきを上げて流れ落ちる滝を眺めながらひと休みする。振り返ると、後ろに三角錐の美しい山が見える。札内岳かな？

こうして滝が連続する滝沿いの急斜面の巻道や岩場をよじ登る急峻なルートに取り付いた。この辺りで何回も事故が起きて死者も出ている。まず足元にシロバナノエゾツガザク



ラの花を見て、右手の急斜面を登り、滑りやすい急な岩場をホールドを探しながら登っていく。周りにシナノキンバイやミヤマダイコンソウ、ミズホウズキの花が咲いている。

滝が連続する三段ノ滝にやってきた。今日は水がいつもより多いので、1段目の滝でロープが張られ、簡易ハーネスで身が確保された。気を引き締めて濡れた岩につかまり、ホールドを探しながら三点支持で急斜面を登っていく。そうして安全な所まで登り後続を待つ。

続いてクロクモソウやユキノシタが生える薄暗いジメジメしたガレ沢を落石に注意しながら登って、次の滝に出た。再びロープが垂らされ、同じように三点支持で登っていく。怖さはそれほどない。適当にスリルがあり、

意外に楽しい。安全な所まで登ると、再び後続を待つ。この辺りは1歩間違うと命がないが、リーダーのコース取りが良く安心できる。

滝が終わると、巨岩が転がる沢の横を登り（いつもは涸沢になるところであるが、今日は水が流れている）、岩のゴロゴロする涸沢の中を遡っていく。

傾斜が緩んできて周りの木が迫り、沢も細くなった。上方に緑のカールも見えてきた。

ガイドさんが若者二人を呼ぶと、二人はどんどん先を急ぎ出した。「ヒグマがいるか、確認しに行ったのでは」と思って見ていたら、やはりそうであった。

斜面の登山道からわずかに右に外れて下り、八ノ沢の最源流から流れ出る水を汲み、喉を潤す。冷たい水が、心地良い。シナノキンバイやシダの草付きの急斜面を登り切ると道が緩やかになり、カール底に着いた。

緑の広い草原を緩やかに、左に八ノ沢カール底を回り込むように進む。すると岩の上に若者二人が座っている姿が見える。その岩を目指して、小沢を渡っていく。辺りには3m四方はある茶色い巨岩が2つ転がっている。ガイドさんが「去年、右手の沢上のガレ場（斜面）から流されたものだ」と、話す。雪崩の力の大きさを直に感じる。

9時25分、平たい巨岩があるテント場に着いた。カールはカムエクの稜線沿いを取り囲むように半月状に広がり、底の中央部の自然石に昭和45年に熊に遭遇し亡くなった福岡大生を慰霊するレリーフが埋めてある。まだ若かった頃に新聞、テレビなどで報道されていたが、その頃は遙か遠くの辺境の地であると思っていて、まさか自分がここに登りに

来るとは……。

岩に腰を下ろして、ゆったりと斜面に少し雪を残したカールやその上のカムエクや左手の美しいピラミッド峰（1853m）を眺める。周りにエゾフウロやヨツバシオガマ、コバイケソウの花がたくさん咲いている。ここは人がまだ余り踏み込んでいない、神の宿る神聖な場である。

前にピラミッド峰を眺めながら草付きのカールを登っていく。ヒグマの真新しい糞を見て、くの字に右に折れ、カムエクに続く稜線を目指して草付きのカール壁を登っていく。振り返るとピラミッド峰が次第に、三角錐状のピラミッド形になってきた。そしてピラミッド峰から続く稜線上の鞍部に着いた。すると霧がかかり始め、周りの景色が見えなくなった。すぐ傍のピラミッド峰も、下の左右の2つのカール（カムエク、コイボクカール）も見えない。イソツツジ、ミヤマダイコンソウの花の咲くここで、しばし休憩する。

ここからハイマツの樹海に入った。日高のハイマツの丈は低いが枝が太く、強靱である。掻き分けるのに力がある。緩くアップダウンを繰り返しながら、岩の混ざった細い尾根道を急登していく。その足元に花を付けたイソツツジ、アオノツガザクラ、ミヤマダイコンソウ、イワウメ、イワヒゲ、ミヤマオダマキ、ベンケイソウ、エゾツガザクラやイソツツジの蕾が見える。またイワヒゲは大きな株に見事な花を咲かせている。これまで見た中で一番美しい。これが見られただけでも、心は躍ってくる。

幾つかの細い岩場を乗っ越し、歩きにくいハイマツの中を進む。すると十勝側の右下が開けてきた。しかし残念ながらまだ八ノ沢カールや十勝平野は望めない。ガイドさんが右手の岩を覗き込んだので、「何が見えるのですか」と尋ねると、「熊の穴」と返事が返ってきた。熊はいないようである。左下にはコイボクカールが広がっていると思うが、これもガスの中である。

山頂直下でも見事なイワヒゲの花を見て、11時05分、狭いカムイエクウチカウシ山の頂に立った。お天気なら北側の展望が一気に開け、ナメワッカ岳の奥に、日高の最高峰・幌尻岳、戸鶯別岳からビバイロと続く山々が横に連なり、左には先日登った夕張岳が、右には十勝から大雪と名峰が続いているはずであるが、白いベールに包まれている。

日高山脈では幌尻岳、この後で登ったペテガリ岳、神威岳でもガスがかかり展望はなかったが、遙か遠く北の山に登れたことに感謝する。Oさんのザックから登頂を祝って、高級スポンジケーキが出された。これを9人で頂く。Oさんの優しさを感じる。





少しして遠雷が聞こえてきた。そこですぐ下山していく。右下に緑のコイボクカールが、右前方に美しい1826 m峰が見えてきて、その左手に見事な三角錐のピラミッド峰も全貌を現した。これらがシャープに切れ落ちる姿を眺めると、同じ日高の幌尻岳を思い出す。

大阪組は八ノ沢カールの壁に咲く花に夢中になっている。12時55分、八ノ沢カールに下りてきた。三段ノ滝では下りでは3回ロープが張られた。登りは楽しいが、下りは滑りやすいので緊張する。ガイドさんは黙ってみんなの下りる様子を見ているだけで、何も指示を出さない。

川の徒渉は水量を見ては、その都度、渡る所を変えていく。沢縁の森の中に踏み跡がたくさんあり、道は登りの時とは変わった。ゆっ

くりと下りてきて16時55分、テントサイトに着いた。

前の沢で汚れた手袋、タオル、顔を洗って夕食になった。今夜の献立はスパゲティとスープである。止んでいた雨が、またしとしと降り始めた。

翌日は雨が上がりテントの外で食事を頂く。どの料理もおいしく満足する。

テントをたたみ、6時20分、山を下りていく。やはりガイドさんは今日も沢の様子を見て、道を変える。踏み跡は迷うほどたくさんある。8時15分、七ツ沢出合に着いた。

クサフジウツキの花を見て林道を歩き始め、上天気なので傘やカッパ、ザックを乾かしながら歩き、車を置いている所に、9時55分に着いた。

札幌に帰っていく途中、十勝で大ブームになっている田中さんの花畑牧場に寄って、



アイスをはおぼる。生キャラメルは大ブレイクで、たくさんの方が行列を作っている。そして帯広の「白樺」に寄り、ジンギスカンをたらふく食べ、お腹を満たす。上等の肉だったのに、700円也で随分安い。田舎なのにお客が多いわけである。後日テレビで、この店を紹介をしていた。最後に温泉に寄って、汚れを落とし、千歳空港に送ってもらう。

カムエクは素敵な山で、私のお気に入りの山になった。体力があればまた登りたいと思う。二百名山で一番良いかも知れない。

《カール壁付近で見た花々》

ウコンウツギ、ヨツバシオガマ、カラマツソウ、チシマフウロ、エゾツガザクラ、ハイオトギリソウ、シナノキンバイ、ミヤマキンポウゲ、エゾシオガマ、ウメバチソウ、エゾウサギギク、イワツメクサ、アオノツガザクラ、エゾヒメクワガタや蕾を付けたチシマアザミ、ナガバキタアザミ、エゾツツジ、黒トウヒレン

おしまこま 10 渡島駒ヶ岳・5 ペテガリ岳・(神威岳)・9 樽前山

平成20年(2008)8月25～31日

今年3回目となる北海道の山旅が始まった。今回はN社のプライベートプランで4座登るが、天気予報によると雨模様の一週間になりそうである。札幌空港でガイドさんと合流すると、天気の関係で予定は大幅に変わり、まず初めに渡島駒ヶ岳に登ることになった。今回のガイドさんは「山と溪谷」に何度も登場する若き佐々木君である。会ったときは「この若さで大丈夫かな」と思ったが、山行を進めるに従い彼の偉大さが分かってきた。

渡島駒ヶ岳は渡島富士とも呼ばれる美しい裾野をもつ活火山で、山麓の大沼と共に道南の観光名所になっている。火口原を囲むように外輪に最高峰の剣ヶ峰、それに砂原(さわら)岳、隅田盛すみだもりの3つのピークがあり、見る角度によって姿は変わる。大沼、小沼は火山の噴火で折戸川がせき止められて造られた。

大沼に着くとまず道を探して、大沼の少し手前の赤井川コースの閑静な別荘地に入っていく。ゲートが締め、登山禁止の大きな看板が出ている。この辺りの赤井川コースの林道を2カ所ほど見に入ったが、どこも登山禁止の看板が出てゲートが締まっている。そこで東側の銚子口コースに回るが、やはり入れない。どこからも入れないので、登ることはできない。